

動物由来感染症 オウム病病原体 *C. psittaci* の実態調査報告

松本 道明・永安 聖二*・戸梶 彰彦・千屋 誠造

The fact-finding report of zoonosis psittacosis pathogenic organ and questionnaire investigation report

Michiaki MATSUMOTO, Seiji NAGAYASU*, Akihiko TOKAJI and Seizou CHIYA

【要旨】 オウム病は鳥類とヒトとの直接的な接触等により感染する動物由来感染症である。特に幼児等抵抗力の弱い者が感染した場合は重症化が懸念されることから、県下の幼稚園・保育所26施設及び小学校1施設、計27施設について、飼育されている動物のアンケート調査と飼い鳥のオウム病病原体保有状況調査を実施した。また、この調査結果を基に啓発用資材としてパンフレットを作成した。

実態調査から下記のことが明らかになった。

- 1 飼育動物は、鳥類が最も多く、次いで哺乳類であった。鳥類ではセキセイインコ、次いでニワトリが多く飼育されていた。
- 2 鳥類の飼育場所は、ほとんどが屋外であった。
- 3 飼育鳥類の世話は、子供単独では行われておらず、先生又は先生の指導のもと行われていた。
- 4 掃除後の手洗いや子供達への手洗い指導は励行されていたが、掃除に際しての手袋、マスク、掃除着等の着用率は低く、手洗いやケージの清掃に消毒薬の使用も少なかった。
- 5 飼育について関係機関へ相談できた施設は4割であった。オウム病は約7割の施設で知っていたが、鳥から感染する病気として特に不安があると挙げられたのは、鳥インフルエンザであった。
- 6 各施設の飼育鳥類の便から *C. psittaci* は、検出されなかった。

Key words : オウム病、リアルタイムPCR、*Chlamydophila psittaci*、動物由来感染症
psittacosis, Real-time quantitative PCR, *Chlamydophila psittaci*, zoonosis

I はじめに

オウム病はオウム病クラミジア (*Chlamydophila psittaci* 以下 *C. psittaci* とする) の感染による動物由来感染症であり、感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律 (感染症法) において4類感染症として規定され、診断された患者の全数の報告が医師に義務付けられている。

感染源としては、病鳥の排泄物からの *C. psittaci* の吸入が主体であるが、口移しの給餌で感染することもあるため、鳥類の飼育において糞便の乾燥・飛散や口移しでの餌やり等の不適切な飼育管理がなされた場合、感染のリスク要因となる。以前、県下の野鳥や飼

育鳥類におけるオウム病病原菌保有状況を調査したところ、全体で2.5%、飼育鳥類の4.5%からオウム病病原体が検出された。

近年の報告数¹⁾は1999年4月から2007年第13週までの8年間に277例あり、年間40例前後で、高知県内の患者報告数は2001年に1例、2003年に1例と既報以来変わっていないが、2001年の川崎市の動物公園におけるシベリアヘラジカの出産に関わった職員の集団発生事例²⁾、2001年の松江市の鳥類飼育展示施設における事例³⁾、2005年の長崎県におけるペットショップから購入した小鳥からの感染が推定された事例⁴⁾や、2005年の神戸市の鳥類飼育展示施設における事例⁵⁾など、ヒトへの感染事例は依然全国で発生し続けている。

* 高知県中央西福祉保健所

近年、ペットブームで推定300万世帯がトリを飼育しているとされ、多くの家庭で鳥類が愛玩動物として飼育されていることがうかがえ、オウム病は我々にとって身近な動物由来感染症である。

今回、県内の幼稚園・保育所を対象に飼育動物の種類や頭数、飼育状況のほか、オウム病をはじめ動物由来感染症対策に係る実施状況等を把握するために、飼育動物の飼育実態調査のアンケート調査と共に、飼いの鳥のオウム病病原体実態調査を行った。

II 調査方法

1 調査対象

過去に鳥類を飼育していたと情報が得られた45施設を対象に、現在の鳥類飼育状況の聞き取りより27施設（幼稚園・保育所26施設、小学校1施設）が調査対象となった。なお、調査時にはオウム病を含めた動物由来感染症対策についての資料を持参し、指導啓発を管轄保健所と協働で行った。

2 アンケート調査

本調査の調査対象とした27施設（幼稚園・保育所26施設、小学校1施設）にアンケートを持参し配布した。なお、配布時には、オウム病を含めた動物由来感染症対策についての資料を持参し、指導啓発を管轄保健所と協働で行った。アンケートは郵送で回収した。

3 オウム病病原体調査

アンケート調査施設で飼育されている鳥類を対象に、オウム病病原体調査を実施した。各施設にはアンケートと同時に、オウム病病原体調査用の便検体採取用キットを持参し配布した。病原体調査に協力が得られた25施設（幼稚園・保育所24施設、小学校1施設）から、ケージ毎に飼育羽数分の便を1検体として、アンケートと共に回収した。

検査は、TaqManPCR法によって行った。

III 結果

1 アンケート結果

調査対象施設のうち26施設（幼稚園・保育所25施設及び小学校1施設）から、次のとおり回答が得られた。図1のとおり26施設で飼育されていた鳥類の飼育羽数は152羽で、セキセイインコが最も多く、次いでニワ

トリであった。鳥類の飼育場所はほとんどが屋外で、屋内飼育は3施設であった。鳥を含めた飼育動物の状況は、図2のとおりであった。

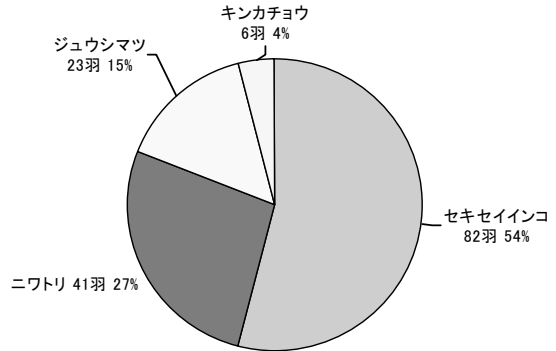


図1 調査した26施設における鳥の飼育羽数と割合

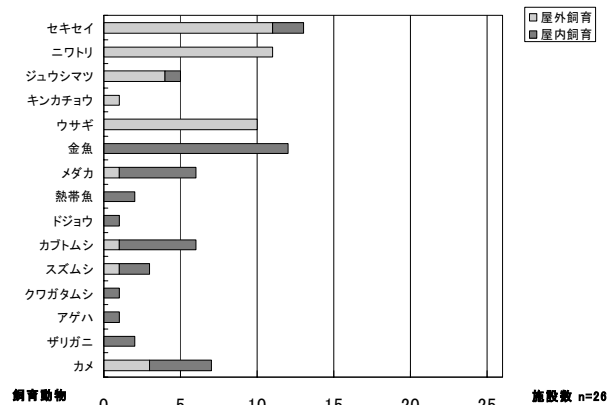


図2 各動物の飼育施設数と飼育場所

動物飼育の主な目的は、情操教育、生命観を養うため、子供達の緊張をほぐす（癒し）が多く挙げられていた。

鳥の世話や掃除については図3のとおりで、子供単独で世話をしている施設はなく、先生のみ、もしくは先生の監視や指導のもと、子供達が世話や掃除に関わっていた。

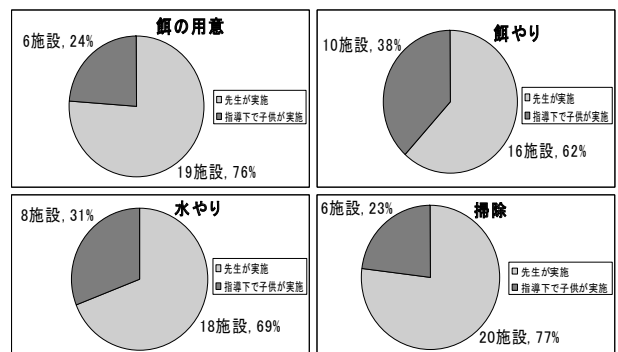


図3 鳥の世話や掃除

子供達が世話に関わっていると回答した12施設では、子供達に対し、鳥との接し方や世話の後の手洗いの指導がなされていた。

しかし、鳥の排泄物等の掃除に際しては、手袋、マスク、掃除着の着用率は低かった。

掃除後の手洗いでは、ほとんどの施設で石鹸が使用されていたが、消毒薬を使用した手洗いの実施は少なかった。また、ケージの清掃でも消毒薬の使用はほとんどなかった。

多くの施設で鳥から感染する病気への不安があったが、特に不安を感じているのは鳥インフルエンザで次いでオウム病が多く、病気はわからないが漠然とした不安があると回答していた。また、これらの不安を保健所等関係機関へ相談ができた施設は約4割であった。

今回の調査以前からオウム病を知っていた施設は約7割であり、その情報はテレビ・新聞・雑誌等のマスコミから得たと回答した施設が13、行政からの啓発・文書で知っていたと回答した5施設を大きく上回っていた。情報収集ツールとしてのインターネットから得た施設は1施設のみであった。

飼育鳥類について、オウム病の検査を実施したことがあると回答したのは1施設のみであった。

2 オウム病病原体調査結果

調査対象の27施設のうち25施設（幼稚園・保育所24施設、小学校1施設）から35検体を受け付けた。

検査結果は、すべての検体から*C. psittaci*は検出されなかった。

IV 考察・まとめ

今回の調査では、鳥類について、ほ乳類（ウサギ）、魚類の順に飼育され、子供達の情操教育や生命観を養うことが主な目的であった。

オウム病を予防するためには、飼い鳥の飼育方法と接し方が重要である。今回の調査では、飼育場所はほとんどが屋外飼育であり、鳥の世話は子供達単独ではなく、すべての施設で先生単独か先生の指導のもとで行われており、各施設とも子供達に対しては十分な注意をはらっていることが分かった。しかし、鳥の排泄物の掃除に際しては、手袋、マスク、掃除着の着用率は低く、掃除後の手洗いに消毒薬を用いた手洗いが少なかった事には注意が必要である。また、ケージの清掃においても消毒薬による消毒をしている施設がほとんど無いことも注意を要する。

ほとんどの施設で鳥から感染する病気への不安があったが、特に不安を感じているものは鳥インフルエンザ、次にオウム病であり、これらの不安があるにもかかわらず相談ができた施設は半数以下であった。相談先は保健所、動物病院、市町村役場の順に多く、今後は相談先の機能や役割を明確にする必要がある。

高知県衛生研究所報第52号⁶⁾で報告したオウム病病原体保有状況調査では調査した鳥類から数%オウム病病原体の*C. psittaci*が検出されたが、今回は検出されなかった。

この調査結果を基に、オウム病予防啓発用資材としてパンフレット「オウム病はオウムの病気？」を作成した。このパンフレットは、教育委員会や学校保健等の研修に積極的に活用している。

今回の調査から、今後、関係する組織がオウム病を日常的に存在するモデル疾患として、予め連携することでオウム病を含めた身近な動物由来感染症に対応するネットワークを構築されることが期待できる。

稿を終えるにあたり、今回の調査研究に際してご協力いただきました社団法人高知県獣医師会、高知市健康福祉部福祉事務所保育課、高知市保健所、高知県教育委員会事務局幼保支援課、高知県畜産課、安芸福祉保健所、中央東福祉保健所、中央西福祉保健所、須崎福祉保健所及び幡多福祉保健所及び調査にご協力頂きました幼稚園・保育所・小学校の方々に深謝致します。

文 献

- 1) 国立感染症研究所：オウム病1994年4月～2007年第13週（2007年5月17日現在）IDWR2007年第19号
- 2) 国立感染症研究所：シベリアヘラジカから感染した動物公園職員のオウム病集団感染事例-川崎市。IASR, Vol. 23, 250-251
- 3) 国立感染症研究所：鳥展示施設に関連したオウム病集団発生事例-島根県松江市。IASR, Vol. 23, 247-248
- 4) 海部春樹ら：家族全員が肺炎を呈したオウム病感染事例-長崎市。IASR, 26(8), 211-212, 2005
- 5) 厚生労働省健康局結核感染症課長：（別添1）神戸市の鳥類展示施設における従業員のオウム病患者発生について。平成18年7月4日付け健感発第0704002号
- 6) 永安聖二ら：オウム病病原体検出TaqManプロンプの感度試験と野鳥、飼育鳥類における保有調査報告。高知県衛生研究所報, 第52号, 39-42, 2006.

【オウム病予防啓発パンフレット】

オウム病はオウムの病気?

オウム病ってどんな病気ですか

オウム病(オウム病クラミジア)に感染した鳥から、人に感染する呼吸器感染症です。

オウム病クラミジアはオウム・インコ類、ハト等のいろいろな鳥を主な感染宿主とし、世界中に広く分布しており、一般的には飼い鳥の約10%がオウム病クラミジアを保有していると考えられています。

人のオウム病は全世界で年間100例発生しています。高知県での発生頻度は、2001年と2002年に1例ずつ、計2例です。

人の症状は?

感染してから症状が出るまでの潜伏期間は1～2週間、発熱(37℃以上)で発症し、咳、痰、筋肉痛等の症状が起きます。

重症化すると呼吸困難、髄膜炎をおこし、まれに死亡することもあります。

鳥の症状は?

元気がない、食欲不振、下痢、呼吸困難をおこし、1～2週間で死にます。

しかしながら、このような症状を伴わずに、オウム病クラミジアを保有している場合もあり、一見して健康に見える場合でも、糞を管理には注意が必要です。

感染経路は?

オウム病クラミジアに感染し、糞を排出している鳥の糞が排泄され、乾燥し粉状になって飛散し、人が吸入することによって感染します。

また、オウム病クラミジアは鳥の糞が等に分泌されるため、口嚙して糞を舐めることによっても感染しています。

飼育実態のアンケート調査 (平成18年度実施)

高知県内の計施設(幼稚園・保育所計、小学校1)に協力をいただき、各施設で飼育されている動物についてアンケート調査を行いました。この結果から次のような予防対策が必要なお知らせがわかりました。

鳥にさわったり、世話をした後は必ずうがいと手洗いをしましょう

※知らぬうちに糞などに触ってしまうこともあるので、必ず手を洗いましょう。

※手洗いには、手洗い用のけんを使った後で、漂白剤けんや薬用けんなどの消毒剤けんを使って消毒をしましょう。

※今日の調査では手洗いの実施は取り行われていたため、消毒剤けんの使用はほとんどありませんでした。

※鳥にさわった後は、手洗いとうがいをしましょう。

手洗い用のけんを使用して、皮膚や手袋の汚れを十分に洗い落とすことに加え、漂白剤けんや薬用けんなどの消毒剤けんを使ってさらに消毒をしましょう。

消毒剤のけんや消毒剤は、製品の表示にしたがって適量に使用しましょう。

オウム病の検査結果 (平成18年度実施)

オウム病の予防対策の一環として、25施設(幼稚園・保育所計24、小学校1)に協力をいただき、鳥の糞35検体について高知県衛生研究所で検査を実施しましたが、オウム病クラミジアは検出されませんでした。

今日の検査結果は陰性でしたが、一般的には飼い鳥の約10%がオウム病クラミジアを保有していると考えられているため、鳥を飼育する際には衛生管理に注意が必要です。

今日の調査では、多くの施設が情報教育・生命教育をうける子供たちの関係をはくす等の目的で動物を飼育されていました。

動物飼育にあたっては、動物から人への健康被害が発生しないことが大前提となります。そのためには以下のような事を実施しましょう。

【オウム病は防げます】

過剰なふれあいは控えましょう

※口嚙して糞を舐めることはおぼえましょう。飼育者が管理人の口にはいる事で感染の原因になります。

※動物への健康被害の発生を防ぐために、糞はなるべく速くで処理しましょう。

今日の調査ではおとり糞の回収がほとんど行われていません。糞の処理については、ほとんどの施設で糞をそのまま保管していました。

鳥の糞はすみやかに処理しましょう

乾燥した糞は吸入することによって空気にたよみ、飛び込みやすくなります。粉にも散らばります。すみやかな処理をお願いします。

また、糞を手で触った場合は、手袋等を介して口から呼吸器に感染するリスクが高くなります。

※乾燥した糞にはマスクやゴム手袋、換気扇等の使用をお願いします。

※ケージや糞入れ、水入れなどの飼育器具は、糞や尿で汚れたままにならないよう定期的な消毒を実施しましょう。

※糞を触った後は、手洗いとうがいをしましょう。

飼育場所には常に消毒剤を散布しましょう。消毒方法はこちらを参考にしてください。

ケージや飼育器具の消毒をするためには、最初に中性洗剤で十分に洗い流した後、次亜塩素酸水や漂白剤など、塩素系漂白剤などで消毒を行い、水気を拭き取ってください。

次亜塩素酸水で消毒が困難な場合は、手袋と同様に、汚れを十分に洗い流した後、漂白剤けんや薬用けんなどでさらに消毒をしましょう。

洗浄剤を使用したオキシムスポンジは、動物用の漂白剤に代って消毒をしてください。

【まとめ】

この様な予防対策によって、感染や手洗い忘れが起きるなどに関係なく、気を付けて飼育しましょう。

- 1 できる限り室外で飼育する(屋内飼育をする場合は、糞を吸く)
- 2 口嚙しによる感染をさける
- 3 手洗いやうがいの動作
- 4 畜生の立寄り鳥の糞処理

鳥を飼っている人が突然など健康被害の症状を呈して医療機関を受診する際には、飼育に鳥を飼育している事も伝えるようにしましょう。

【相談しましょう】

今日の調査ではほとんどの施設で鳥から感染する病虫への対策を怠っていました。特に対策を怠っているのは鳥インフルエンザ、オウム病でした。

また、飼育鳥から人への感染防止対策が十分でない施設もいくつかありました。

動物から感染する人の病気や心配についての相談先は

農畜りの福祉課健康課へ

安芸 福祉 保健所	〒784-0001 安芸市役所内4-3-36	08671361070
中央 福祉 保健所	〒782-0011 香美町上島山田山128-1	08671351090
中央 西端 福祉 保健所	〒789-0129 高岡郡北条町中243-4	08691221099
庄原 福祉 保健所	〒786-0005 庄原市東山町20-28	08691421099
幡豆 福祉 保健所	〒787-0028 比治町中津山平津18	08691341090
高 知 市 保 健 所	〒780-0900 高知市丸の内2-4-1	08913221099
香 土 市 保 健 所	〒780-0900 高知市丸の内2-4-1	08913211490

動物の病気や心配についての相談先は

農畜りの動物病院へ

動物由来感染症をもっと知るための参考ホームページ

厚生労働省 動物由来感染症ホームページ <http://www.hlth.go.jp/infocenter/zoo/>

高知県衛生研究所ホームページ <http://www.med-net.kochi.go.jp/ginkaku/>

今日の調査では、ほとんどの施設で飼っている動物がすべてオウム病に感染していません。飼育鳥から人への感染防止対策が徹底されています。飼育鳥の糞を適切に処理していただくことで、感染防止対策が効果的であるとされています。また、オウム病の感染防止対策として、飼育鳥の糞を適切に処理していただくことが重要です。また、オウム病の感染防止対策として、飼育鳥の糞を適切に処理していただくことが重要です。

発行・編集
高知県衛生研究所
〒780-0900 高知市丸の内2丁目4-1
TEL: 089-3211-4900
FAX: 089-3211-6204
E-mail: 731229@med-net.kochi.go.jp
<http://www.med-net.kochi.go.jp/ginkaku/>